

宇都宮の施設「うりずん」、**「新しい医療」賞を受賞** 重度障害児ら一時預かり

人工呼吸器などが必要な重度障害児らを介護する家族の負担を軽減させようと、2008年6月から日中の一時預かりサービスを始めた宇都宮市新里町丙の重症障がい児者レスパイト（休息）ケア施設「うりずん」。介護を支援する地道な活動が評価され、2010年11月に「医療の質・安全学会」（理事長・高久史磨自治医科大学長）の第4回「新しい医療のかたち」賞を受賞した。同所の診療所「ひばりクリニック」に「うりずん」を併設した高橋昭彦院長は「安心と安全をモットーに介護や保育を支援したい」と話している。（茂木信幸）

一時預かりの子供は1歳から13歳まで男女4人。障害が重く人工呼吸器を付けたり、鼻や口からの栄養補給が必要な子供たちばかりだ。子供たちの

痰の吸引や体位の調整、絵本の読み聞かせとスタッフは働き通し。平日の預かり時間は午前10時から午後4時まで。交代で取る昼食を除けば一息つく時間はほとんどない。

高橋院長が施設の必要性を痛感したのは2006年9月。人工呼吸管理が必要な子供を訪問診療した際、体調を崩した母親の代わりに父親が会社を欠勤して介護に当たっていた現実だった。

いくつかのハードルを行政の支援などを得て乗り越え、「ひばりクリニック」（2002年5月に開業）に併設。本年度（2010年11月末時点）の延べ利用人数は340人と前年度の351人を上回るペースで推移している。

（下野新聞・宇都宮 2010年12月23日）

障害児向けランドセル10年、ぼくにもしよえた

春の入学シーズンを前に、大手ランドセルメーカー「協和」（東京都千代田区）には、障害をもつ子どもの親たちからの特別注文が今年も舞い込んでいる。「みんなと同じようにランドセルを背負わせたい」。10年以上にわたり続く「世界で一つだけのランドセル」の製作もピークを迎えている。

「もっと軽いランドセルはありませんか」。人工皮革の軽量ランドセルを年間20万個製造する同社の専務取締役・若松秀夫さんが、毎年寄せられる問い合わせの意味を知ったのは1998年頃。「普通学級に行く子どもが、どうしてもみんなと一緒にランドセルを背負いたいと言うんです」。製品作りの視点から障害児のことが抜け落ちていたことに気づき、はっとした。

「ランドセルへの憧れはどの子も同じ」。若松さんは、親たちへの聞き取りを重ね、2000年1月、軽さと扱いやすさを追求した特注品第1号を完成さ

せた。

外見は市販品とあまり変わらないが、障害の特性に応じて工夫を凝らす。肩ベルトの当たりが柔らくなるようウレタン素材を埋め込んだり、金具の開閉が難しいふたやポケットには、簡単に開閉できるよう面ファスナーなどを使ったり……。重さも市販品は約900gだが、軽いものでは約700gに抑えた。

「車いすの背にかけられるもの」「何も入れないので、とにかく背負えればいい」。小柄な子に合わせた図面を送ってくる親も。すべての注文に、身長、体重、座高、肩幅、利き腕などのデータを取り寄せ、仕上げる。2～3万円台の価格は市販品と同じ。今シーズンは約250個を受注した。

これまでに製作した特注ランドセルは約3,000個。ほぼ同数の感謝の手紙が届き、ランドセル姿の写真が添えられていることも多い。

（読売新聞・東京 2011年1月7日）